

## 表紙, 目次, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38315">http://hdl.handle.net/2297/38315</a>

大正二年七月一日發行

# 十全會雜誌

卷八十第  
號七第  
(號十九第)

全澤醫學專門學校十全會

# 十全會雜誌(第十卷第七號)目次

## ○原著及實驗

- 脾瘡發生ニ關スル二三ノ事項。 岡本京太郎
- 所謂脾瘡ハ獨立ノ疾患ナリヤ。 岡本京太郎
- 紅彩結核ノ一例。 佐竹秀一
- 早發性癡病ノ身體的症候トシテノ遲脈。 井村勇作

## ○通信

- 本正生氏通信。

## ○校內雜報

- 講話部大會。

## ○叙任及辞令

- 文部省。
- 石川縣。

## ○人事

- 高山教授の不幸。
- 古屋榮治氏。
- 淺井泰氏。
- 太田卯三郎氏。
- 塚本政治氏。
- 池上豐氏。
- 渡邊八之進氏。
- 白淵良基氏。
- 楠田利一郎氏。

## ○會告

- 校外特別會員會費納付調書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校十全會收入豫算書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校十全會支出豫算書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校十全會臨時費支出豫算書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校々々特別會員會費收入豫算書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校々々特別會員會費支出豫算書。
- 大正二年度金澤醫學專門學校々々十全會資金部支出豫算書。



通信

●本 正生氏通信 (十全會宛)

全氏は昨年本校醫學部を卒業するや直に金澤病院神經科に止り次て本年二月雄圖を抱きて遠く北米の天地に渡り今やポートランド市にありて獨立開業に従事しつゝあり思ふに全君の頑強なる身体と堅固なる意思とは北米の新天地に於て奮闘活動するに最も適當したるものなり今や全君は此の銳器を擧へて異郷の地に努力す。全君の成効期して待つべし以て後輩の最大刺戟とするに足らん。切に好漢の自愛を祈る。

北米合衆國渡航記

謹啓各位益御健康御勉學の段喜悅の至りに奉存候着米以來二箇月經過致し候旅行の有様等御報知申上度存候ひしも彼是俗事に多忙を極め日延び致候惡しからず御教有之度願上候故郷遠く離れし此地に來り學びの道に先輩も友も皆無實に淋しく候雨にあれ風に吹き飛ばされてコロンビヤ河流の邊りに「ホームシツク」を起し居候瘦せ我慢さ雖も百聞は一見に如かず候、樂觀の点も悲觀の点も交々有之候、勿論米國へは先輩の渡米少なく在校當時より能く其事情に精通せざりしは遺憾に御座候、松原博士の御示教の点は一致し深く奉謝候、申す迄も無之こと多々に候へども將來御渡米の方の御參考と思はれ爰に見聞のありのまゝを申述べ候、まあ旅行の目的から書き申候元來五尺二寸の小軀物騒千萬の醜顔以て得意なる余は幼より海邊に育ち西比利亞下しに白帆を望み船乗り好きだつた濱男、色黒きも印度土人に劣ら

じと自信す、何の勢であつたか北米合衆國が見たくてたまらず折あらば來り見んさ待ち構へて居た去年十一月二十八日に海外旅券の下附出願十二月十九日首尾よく下附さなる、光武帝曰く志有る者事遂になるさ自らしやれた、しかし財布には一厘もなし、まして渡航準備に着手し、借金は山々懐中の寒氣は實に嚴しい、ぐづぐづさるる御隣の家から先に賣らなければ渡航費も何もなくなるさ心は矢竹に走りだした、  
正月十二日朝五時、生ぶ聲擧げし故村の母上に別れを惜み父上の遺靈に南無阿彌陀佛浮き世の吹雪に弄ばれて金澤驛へ出た、先輩朋友の御送により寒さも氣も和らいだ、同十一時二十五分、いよいよ金澤を基点として去る、眞に危険な旅路につくのであつた、上は大聖寺下は石動より知つた所はない様な者、未だ日本帝國の三府を存せず、生來余は貧乏書生旅行する爲に金は一厘も乞へども恵まれなかつた、時々思ふたこともある、親子何にする金さへあれば金が親子にして呉れると思ふた、勿論理髮料の高きををしま、青僧になるさ約七ヶ月に及んだも此れが原因、青僧は滑稽に非ずして貧乏を意味した、金澤發の汽車室は二等か一等に乗りたかつた、而し三等にのつたのも金はなかつたからで、勿論一二等は乗つたことなく味を知らない、而し人間は經濟を知らぬ亡國の民さなる故余の如き乞食は三等以て極樂淨土と喜んだ、停車場で別れてから、日々散歩した犀川鐵橋を越ぬ千代尼の古跡松任驛に着いた、名物圓八あんころを買ふて食つた、あんころの賣り聲も名殘惜しく感した、次で美川、小松、動橋、大聖寺を過ぎ福井驛へ着いて腹がへつた、辨當く、わい辨當くれと手を出した、十五錢で甘味かつた、次で忠臣新田義貞の社を拜した、いつのまにやら敦賀驛だ、宮本君がはざく會つて呉れてうれしかつた、暫時快談相變らず若者同士よるさ盛な話が出る、君さ「シエクハンド」した、米原驛に下車附近の茶屋に一服うごん食つたが味なかつた、天下の關ヶ原木曾川等は夢の中に通り越むて名古屋で下車、時は夜の十一時過ぎ、市内見物、金澤は雪で冷か、名

古屋は暗れて風寒し、約三時間位散歩の後急行五十錢割込列車にて新橋へ急いだ、寝むいゝ居た内に夜はほのぼのさあけ烏神經科でやつた樂遊の名句は思ひ出された、するま白嶺の富士三保の松原さしやれる、實に景色はよかつた、昨日迄は北國の吹雪、今日は東海の白日蒼海、天候の異なるも又格別、十三日午前十時頃新橋へ着く。

着京以來學校病院見學多少の得る所あり萩原海軍々醫殿と愉快に二日暮す思ひの外殺風景な所である、人口稠密の結果かくあるべきは御尤だろ、横濱へ十六日行つてきた廿三日東京を引き擧げ再び横濱へ行きしに渡米規則寛くなつたさ又もや歸京此時大枚三圓は水の泡さきけ失せた、廿七日朝から身体検査舉行といふ御告げで、

廿六日夜七時芝神明大門附近の宿を辭し新橋から急行列車で横濱へきた、廿七日午前九時、神奈川縣廳にて身体検査、意外に平易單に眼診と検便、トラホーム、十二指腸虫、このみ便は一々もつて行くのであつた、

廿八日夜九時、身体検査合格の通知來たるうれしかつた、愈々乗船出來ることゝなつた、横濱旅館には常に多數の海外旅行者あり、意氣天を衝く様な青年も又悲觀の極穴でも入る様な顔した者も居る、殆んど米國行である、ハワイ行き隨分居る、米國行きは「トラホーム」十二指腸虫の爲に殆んど一度は不合格なる、殊に十二指腸虫の爲に乘船延期の百性連なかゝ多し驅出の爲二週間位は大概をくれる、余は幸にして第一回で直き直き合格、正月以來初めから合格したのは余の外にたつた一人しか無かつた由、一体全体どういふ理由か、御宿の金儲けか又は醫者の金儲けかさあやしまれる様なもの、それも合格發表は宿の者の口づつたひにて承知するのみだつた、眞に同情の念に堪へない。

廿九日午後三時、郵船會社に出頭色々尋問せられた、平易に答ふれば合格する、一寸云はば原籍地、生年月日、兄弟姉妹、父母、渡米の目的、身体疾病等を尋ねる一口づゝ答るゝ、英文で御役人は書いゝる、心配したこゝ

はない、廿日午前九時、水上警察署に出頭す、巡查の權利に恐入るしかし、これも頭をさげ居さいすれば無事通過は出来る、

同午後二時半横濱解纜、兄上が見送つて呉れまして淋しさは比較的少なかつた、午後一時兄上と共に佐賀丸へ乗つた、あはたしくせめて内の親、學校の先生には知らさぬと薄情かと思つて電報うつた、東京から二三名の朋友も送つて呉れる、荷物も旅行券も宿から郵船會社を経て皆船に積み込まれさる、船へ乗るさて手には何も持つ必要はない、隨分輕便な者であつた、横濱の宿泊料は劣等でも日に二圓位かゝつた、出帆の前日持參金は宿に米貨に換へて呉れた、少ない金が又半分になつた氣がして心細かつた、滞濱約五日多忙さきたら御話にならない、佐渡丸は棧橋に横付けられさる乗船してからあこゝと見あらく、廣い六千五百噸の船だ最早二時過ぎと思ふ頃「ベル」が鳴る、見送人は皆かへる唯水上警察の巡查七八名乗つてゐる二時半過ぎる頃いよゝ出帆、爆竹煙花天地に轟き他に何物もきかれぬ、見送れる人の物言ふもきけぬ、單にあつたこのみ思ふ計り、船尾底の水進機は運轉開始ゴト／＼鳴り出して止まぬ、身に其振動がこたへる、約三十分間も爆竹の音は止まぬ、其中に船はしづ／＼と棧橋を離れた、もう見送人さ話を交はすこゝも出來ぬ、單にアーツと思ふのみ、これが渺茫たる太平洋へ乗り出す初光景でした、送つた人は棧橋に柵作り名残を惜む、行く者留る者互に「ハンカチーフ」を振り出した、萬歳を絶呼する數團の觀送者あり、娘と別れがつからぬ泣くもあり夫渡米せんさす數年の間が淋しい泣く婦ありさいふ好合で其狀千差萬別一々筆にすべくもあらず、余は米國へ行くさて死んだ者もないと思ひ平然と別れて仕舞ふたそれでも女などが送つて泣いて呉るれば又魚心に水さ云ふ氣がしなかつたでもなからう、棧橋よりばなれる途に「ハンカチーフ」も棧橋も茫然と見ゆる、皆が「ハンカチーフ」振るから余は振らぬのも氣が悪いと思ふて振つてやつた、手のだけ

いには困つた、出帆後約一時間、突然停船、處は波止場を出て直きの箇所港内よりやゝ波荒し、巡查は甲板に於て一人一人を檢する、其狀は調度水上警察でやつた通り、斯くして検査済みの者は甲板上に留む船室には誰も居ないそこで巡查は船内隈なく捜索す、秘密行者は居ない、約一時間餘にして巡查連は小蒸氣にて歸濱佐渡丸は再び進行開始、水進機廻轉音勇ましく、品川灣頭に眞白き飛沫を散じた、着米迄此進行は止むなし、次第に夕方になる、夕日は相州房州の斷崖絶壁をてらし、相州の上遙かに白鳥逆にかゝる富士山を望む、やがて觀音崎の沖も過ぎ甲板上洋風強し余も遂に船室に入る、室は二等船尾に近く其動搖のうるさく言語に絶せり、日は暮れ夕飯となつた夕飯合圖の「ベール」がなる、洋食さしやれる、而し金澤に居た頃からこんな者は食べなれぬ胸が悪くなつて直ぐよした、午後七時頃なりしが、東京灣を出た頃甲板上に出づれども陸影分らず越し方をながむれど跡白波のみ、室に入れば腐卵様の惡臭鼻を衝き此所彼所にゲーハー／＼といふ「エルブレッツヘン」の音機關の運轉のみ、殆んど船暈に罹らぬ者なし、やがて空しく夜はふけて、十二時船員も殆んど寢靜まる、余も身のつかれにまかせて寢る、熟睡し難したゞ親兄弟のここのみ思ふ、故國に名殘惜まれて生別れの悲しきを初めて知つた、余の心は有爲轉變の世の中じや船窓あけて空見れば月の光朧げに見ては隠れ隠れば又現はる時に悲み時に樂めり、船中と雖も夜の二時頃は幽靈の出さうにシーンとささる、三十一日朝七時頃ホーイが藤澤軍醫、宮本醫學士の端書を持參した、なか／＼氣の利いた二君である、船へあてゝ呉れたとは自ら感謝せざるを得ず、二人共大した事を書いて呉れたが自ら汗顔の至り而して友情唯ならず喜び繰り返し／＼して讀む、甲板上へ出て見た、怒濤渦巻いて左舷をうち波沫甲板を洗ふ、北風寒く帆檣にはぶみヒューと呻てる、甲板の余曲折すれば短身今や着海の屑たるを覺ゆ、君子危きに近よらずと思ひ室へ入つた、「メデーユム」は水製の圓板水堀線遙かの沖に向く處圓形、天氣晴朗にして

一天の雲なし金澤の太陽と同じ太陽が空にある、下は太平洋の蒼々たる荒波、そも金石沖の波さ一差なし、船首東北猛進、船は巨濤に擧じて淺谷に入る大船と雖も洋上の木の葉の如し、近きにも遠きにも船は一隻も見ぬ、動搖の狀又快ならざるはなし、船尾には水進機や舵の音コト／＼カタ／＼と矢ヶ間敷しく各室船客の嘔吐の音しきりなり血をぞ吐く弱虫も居る船内の臭さにて自然に醉を催し易い、殊に三等室の臭氣は特別であつた、二月一日午前十時起床動搖激しく波荒ふるこゝ前日の如し、甲板散步、寒風肌を引きさくが如し、陸は勿論見ぬが西の方遙かな沖に二三羽かもめが飛んぐる誠に不思議であつた、彼等は波上にのみ生活する筈はない、陸から來たらしい、鳥の速度の早さは一時間五十哩も出るこゝありと聞い、御尤もかなと合点した、此所は陸から二哩程巨つてる由であつた、飯も何も食へたくない、舩は動搖の餘り癆れて恰も半醉の態

二月二日午前九時起床甲板散步、「クリスチャン」らしい二十歳前後の「ナルドミツ」綺緻は十人並み凹める眼して右舷にすがつて空や下を見つめつゝ幸多かれと祈るらしい、得意に讚美歌を唱ふる、神の恵み「主イエス」の愛豊かに満つ此御殿娘聲朗らかに波間に響き君は谷の百合花か嶺の櫻らかの狀もある物騒な余も之れには一興を得た以て余も音楽に興味を有することとなる、姫髪黒く亂れしはそよ吹く洋風に棚引きつ余傍に至る「ナルドミス」室へ潛む甲板上は己一人の天下となつた、船室に歸り鏡に向ふて「ハイカラ」たらんと欲した、眼窩陥没、面「アロース」無勢力なのに驚いた、佐渡丸一等運轉士林耕造先生の面會狀を持參せし爲同先生來られ慰安を給ふ、此船の外交官である、温厚篤實の君子であつた、時々同先生の室に御邪覺御馳走に預る深く感謝の至りに堪へず、海上進行法、米國海上規則、機關部見學程度、偉度、無線電信器等を習得す、先生は船長の次位にあり、金澤醫專校とは間接に關係ありと、何となれば福井縣の方に於て其朋友血族間に該校出身の御醫者ある由林篤先生と同級生であつた由、船

長は二等運轉士の扶助の下に船の進行を司り一等運轉士は着港時荷物のことを司る、商船學校航海科生二名、機關科生一名も乗船して眞黒になつて働いてゐる、郵船會社員等は時々船客の御機嫌伺ひに来る、一等運轉士は海軍少佐の服装と思ふて可なり、

二月三日朝十時頃起床寒い、甲板上是雪だらけ降降り續く、千島方面に近いた寒帯地の寒いはあたり前、而し室内は蒸氣の爲に溫和横濱解纜以來四日たつた、

二月四日朝七時起きんと欲して腰立たず頭痛腹痛、腹痛、便秘の病人となつた、御手製の調薬口に苦し、午後三時頃快復した、頭痛上昇は充分に癒はなかつた、夜林先生に南洋の護謨栽培其他歐洲行路の談を聞き興味湧くが如し、無線電信で日本傾り来る、「コンニヤク」判で中折紙に書いてある、列記すれば如次、

○東京 倉知外務次官辭任、松池四郎氏後任となる、

○敦賀 露國義勇艦(ホルタヲ)雪の爲に君狹灣に坐上、救助中、船客無事、

○ハリマン 二〇〇萬弗にて東洋大學設置に決す、

○倫敦 卅一日「バルカン」は三日午後七時戰鬪開始、從軍記者許さず、「トルコ」は内亂の恐れあり、

○東京 飛行機一日所澤より來り飛ぶ豫定、

○セルビヤ、モンテネグロ」は平和を願ひ、「ブルガリヤ」は戰鬪を望む

「トルコ」は内亂の恐れあり、

○北京 孫逸仙は四月亞米利加に向ふ筈、

○日本練習艦隊は十四日「シドニイ」に向け出發の筈、其他略す、

斯く日本船に於ても無線電信の設備ありかつて加賀國鶴來出身の村井吉兵衛氏北國新聞上に渡米感を載せた時無線電信の記事ありしは誠であつた、此晚入浴した、頭の前から足先まで垢粒々々湧き出て油は滴々として汚なき、驚きに堪へたり、五十錢「ボーイ」に支拂ふ、やらぬと又入浴するに

都合が悪い、巾が利かない、

船は露領内へ進行し、千島沖を通過した相であつた、隨分寒くなる、身体髪膚之を父母に受く敢て毀損せざるは我身が一の愛いからだ風引かぬ様に床へ入つた、

二月五日午前九時起床、甲板に立つ、前後左右には大波連綿、北風強し波は北より南に疾走、佐渡は一生懸命に怒濤を蹴て北に急ぐ、帆樫及風受パイプに風は、ぶんでビュー、恰も荒野に蠻獸の嘶く如く實に物荒涼し、帆柱はあれど順風に帆は上げられず風のはぶむだけ邪覺の様に感じた、本夜にて電信が不通なる由で七日も航海した陸遠き海に浮びながら電報うつた、内に母が心配しると思ふたからであつた、乗船以來寢れば親を思ふ、夢である、渡米後の心配なさずれど一寸も夢に見る者でない、醫學上の解も眞に當つてゐるを實見した、身体は瘠れて倦怠船はいやになつた、船路は未だ半分來ない、航海の辛苦も思ひ知らる、先きに太平洋の怒濤を蹴る壯快と思ひしは夢の様であつた、願へば思ふ程太平洋の航海の難きを知る、經驗は最良の教師なりと、此航海實に難儀であつた、快と思ひしは想像であつた、想像はよく間違ひ易し、船の動搖の爲に身の、われる様な感がする事もあつた、而し誰一人死ぬる者もなく虚弱き女子供すら渡るを見れば恐るゝには足らぬ、

日々斯くして暮した、以下つまらぬことは省略す、

二月六日

二月六日 二月六日は二日あつた、何とすれば船が西經へ進入したからである、地文學をやつた者のよく了解出来ることである、一支那人ありよく英語を話べる、餘りやさしい顔しるから考へて「ハプニューグードタイム」と云ふて見た、向ふは喜んで談しかけて來た、一寸も分らぬ、どうやらこゝうやらして考へて云ふことは向ふにやつと通じたが向ふの云ふこと分らぬのに閉口して話は止んだ、英語といふものは白人の様に頭の鍵を少しは

ずした様にして云はぬと發音がうまく行かぬらしい、とても余等の英語は英語のAもいはれぬと笑はれた、此支那人は米國に十五年も滞在した奴であつた、彼は盛に「ペンシル」で紙上に孫逸仙は賊子と云ふて攻撃しゝる其手まれば足まれば以て悟るを得、夜船はポーポーヒーと汽笛を鳴らしつゝ進行する、海上船舶衝突豫防法である、

二月八日、夜船員役者となつて芝居を催す、長途の航海に疲勞せる船客を慰むる爲まは云へ、一方には金儲けである、船員は船客を慰安する必要ありと雖も唯ばやらない、御客様の希望とあればやるさふれ廻はる、寄附金募集に来る皆再渡航の船客だから二圓位寄附した、いや／＼ながら二圓取られた、夜の八時頃開始さる、舞臺は三等の休憩場恰も田舎の芝居小屋の様幕に皆整ふさる、番附は次記のもの、

一番目 二人羽織 一幕

二番目 意外之出世 三幕

一、植木屋店の場

二、前園伯爵座敷の場

三、全 奥庭の場

三番目 言はず語らず 三幕

一、花房貞一宅の場

二、松並木の場

三、花房貞一宅の場

四番目 喜劇一萬兩 一幕

船中の芝居役者は素人なれど眞面目にやる處はなか／＼振つた、船暈の何たるを自覺せぬ様に役者の滑稽なるも特に注目に價値す、  
 二月九日、十日、波荒れて海上危険、其他持記すべきなし、  
 二月十一日、夜八時頃から浪花節、五十錢徴發せられた、講演の辨士は矢張り船員、番組は次の如し。

一、大石妻子別れの一幕

二、女俠客玉川によし

三、勸進帳

其他二席

中には浪花節屋も居たらしく、なか／＼に振つた、芝居より面白かつた、

金澤は香林坊の小福座の木戸錢五錢位の價があつた、

十二日、東京の内閣の騒動が無線電信で一々知らさる其は北米から通信する、日本から直接無線電信はきかない、何さなれば船は既に六日以後は西

經へ進入して居たからである、

十三日、十四日、波は荒し時々鷗一羽或は二羽飛ぶを見る、米大陸へ近つ

いた事を想像出来る、誰れも彼も上陸の用意に着手する、荷物の整理等

した。(未完)

大正二年四月二十四日

北米カレゴン州ボーランド市

北十二街百三十一番地

本 正 生

Doctor M. Moto

c/o 131, 12th Street North

Portland, Oregon, U. S. A.





# 校内雜報

## ● 講話部大會 (五月十日)

雨しきり降る五月十日本校大講堂に於いて第十三回講話部大會が開かれた。午前十時頃部長藏光教授の開會の辭に依り始まる。

### 一、近代の「ツァイトガイス」と頹廢的傾向。

醫一 石原 巖

近代的の思想は科學に根底ありまなし「ダウイーン」の進化論をひき自然科學の發達は吾人の生活方面を一變して生存競争の劇烈を來したりと述べて頹廢的傾向に就いて論ぜんとするとき規定の時迫まりて降壇。

### 二、疾病。

醫一 水 島 宣

自ら求めずして來りたる疾病も之を客觀的に考ふときは自ら招きたるもの多し、故に疾病は一の罪惡なりと。

### 三、實驗談。

村 上 教授

何れの方面に向ふも頓智といふことは必要であるとして歴史上や傳説に於て此の頓智が危急の場合に役立つたことを面白く述べられて後「私が二十四五の頃或病院に於て一週一度監獄へ囚徒の診察に行つた、或日一人の囚徒が突然腹痛を訴へた、これまで色々投薬したが何の効もなかつたといふそこで私が瀉水の皮下注射をした處が全く其腹痛が治つた。——以前は囚徒が假病を作つて新しい醫者が來れば之を試めず爲めにやつたものだけいふ。——これで全く其腹痛が假病であつたことが判つた云々

此間約三十分の休憩、午後一時から……………

### 四、吾等の前途。

醫一 古川 定 雄

物價騰貴生活難の聲四方に起る、吾等は特殊の教育を有する者なれば宜しく海外に飛躍すべき也と。

### 五、養命補身丸。

醫三 村 山 良 平

智力金力体力の三者は人類生存に必要なもの也、吾人の肉體及精神は此三者によりて養はる、然れどもまた危急の場合に處する爲め余裕なかるべからずとて多くの引證比喩を以つて怪辯を振はる。

### 六、生の喜び。

醫三 崎 山 敏 雄

生の目的は何ぞ曰く……………曰く……………。要之天地の間に僭在する大なる力に支配せられて實に美しかる生活を送り神の御手に抱かれ眞の生の喜びを味はん哉と。

### 七、「エルケルツング」。(獨乙語會話)

醫四 松 江 常 行

鹿野重太郎

### 當日第一の愛嬌!!

特 竹 内 善 松

### 八、スミス氏症狀の診斷的價值。

先づ本症狀の「リテラツール」を述べ次で自家の實驗例に及ばれた、即ち明に獨樂音を聽診し得る者及幽微なる心音毎に此音をきし得る者(甲狀腺腫反心臓病を有する者を除く)百三十四例に就て結核と本症狀との關係を表示し次の如く結ばれた。(1)スミス氏症狀は肺結核及氣管枝加淋巴腺結核と密接の關係あり(2)臨床上非結核と認むる者には本症狀をきくこと比較的少し(3)乳兒の非結核と認むる者に殆ど本症狀をきかず(4)デ、ラ、カンブ氏症狀と本症狀とは相平行するが如し(5)本症狀は頭の細太長短には大なる關係なきが如し。

此間部長の色々の報告や生沼、岡島兩博士よりの書信の御披露があつた。

九、自家考案の標本供覧箱に就て。

石川 教授

實物を供覧の上其使用法や利益のあることを説明せられた。

十、傳達無痛法に就いて。 宮田 教授

外科の發達は無痛法の進歩に伴ふことなし先づ無痛法の歴史に就いて詳しく述べられた。——化學的に局所麻痺を施すに至つたのは中世紀以後で殊に一八六〇年「コカイン」が発見せられ一八八四年始めて知覺神經の麻痺に用へられたのに始まる。——そして今日無痛法として用へらるゝ主なる種類は壓迫法、寒冷法、塗布法、注射法、侵潤法、ビール靜脈麻痺、動脈麻痺、傳達麻痺等であること其麻痺方法及薬劑に就いて詳細に述べられた。

本題の傳達麻痺に就いては次回を約して降壇せられた。

十一、肺緊張の發生。

金子 教授

胎兒が生れて空氣を吸入して肺胞がひろがる、そして肺が収縮せんことをき勢心臓をも壓迫し從て血行も悪くなる、此とき肺が胸廓から壓迫せられてゐることは明である、生後數週の間此状態にあるが成人の肺は最早や胸廓の壓迫をうけない、そして肺は其固有の彈力により陰壓に堪ふる壓力を持つてゐるから肋膜に沿つて緊張状態を有して居る故に肺の肋間の部が反つて凹陥してゐる。此變化は胸腔の成長が胸壁の成長よりも大なる爲めに生ずるものである云々。

(以上文責記者)

午後四時半は數人の辯士を残して閉會を告げればならなかつた、それは翌日の本校記念日の爲め講堂の準備を要したからである。

\* \* \* \* \*

顧みるにわが部は曩に通俗醫事講談會を開くなご幾分發展の曙光に接したとはいふものゝなほ振はざるを覺ゆ。來らん新しき學年には諸兄の熱心なる後援を得て講話會をして一層意義あるものたらしめことを希望して今學年の筆を擱く。

(二、六、一、柳生)

### 叙任及辭令

#### ●文部省

休職ヲ命ス 休職金澤醫學專門學校教授 林 篤

復職ヲ命ス (五月三十一日)

金澤醫學專門學校教授 林 篤

外國留學中年俸金參百六拾圓ヲ支給ス

#### ●石川縣

醫員拜命 十二級俸給與

大脇 彌平 (大元)

婦人科勤務 (五月三十日)

醫員拜命 十二級俸給與

野坂 賢藏 (大元)

外科一部勤務 (六月二十一日)

\* \* \* \* \*

# 人事

●高山教授の不幸 高山教授令息千里氏は年來の宿阿癒へす専ら療養に盡されしが遂に去る六月三日逝去せらる謹而哀悼の意を表す。

●古屋榮治氏 (明治四十年年度卒業)は卒業後小松町國府病院に勤務せられし事半歳次きて金澤病院外科一部に醫員となり下平博士の下に外科實地研究及患者治療に敏腕を振はれ名聲高かりしが昨年一月職を辭し舩倉島の脚氣調査に出張せられ十一月再び歸任従前の如く外科一部に勤務中なりしが今回北海道根室病院外科部長に榮轉し去る六月八日金澤を出發就任せられたり。

●淺井 泰氏 (明治四十四年度卒業)は卒業後鬼頭教授の下に婦産科研究せらる事半歳次きて醫員拜命後藏光部長の下に同科に於て患者診療に従事せられ後下平外科、宮田外科に外科學を土肥部長の下に皮微科を見學研究中なりしが今回尾尾銅山醫局の外科主任として榮轉せられ五月二十二日金澤出發就任の途に上らる。

●太田卯三郎氏 (四十二年年度卒業)群馬縣横川町に開業中なる氏は去る二十一日私用にて來澤二日滞在の上歸國せられ、此期を下して同期卒業生六名相會し同期會を開催せり。

●塚本政治氏 (全上)は卒業後金澤病院内科一部にあり山崎教授の下に止るこき五ヶ月次で四十三年四月上京して醫科大學入澤内科介補に轉任して内科を專攻し四十四年四月鳥取縣立病院内科主任に赴任し止るこき二年にして本年四月辭職の上當金澤醫專學校醫學教室に歸り加藤教

授の下に醫化學を專攻しつゝありしが此度軍圖を企て本月中旬再び上京し來八月中旬渡獨の途に就かるゝ云ふ。

●池上 豊氏 (明治四十四年度卒業)は石川縣警察醫を勤務せられしが今回辭職の上渡臺して臺北醫院に勤務せらる。

●渡邊八之進氏 (明治四十四年度卒業)は卒業後敦賀病院に奉職中なりしが今回渡臺して基隆に開業中なる本校出身高柳氏の病院に附任せらる。

●白淵良基氏 (明治四十四年度卒業)は故里能州小木にて開業中なりしが鳥取縣立病院外科へ赴任せられたり。

●楠田利一郎氏 (大正元年度卒業)は卒業後新潟醫專附屬病院の皮膚泌尿器科に赴任して専ら泌尿器病を研究中なりしが此度鳥取縣立病院外科部へ轉任し途中金澤病院に立寄られたり。



## 會 告

●自大正二年五月十六日 校外特別會員會費納付調書  
至全 六月二十日

金額	期 限	氏 名
金貳圓	自四十四年度	吉 澤 祐 寛君
金貳圓	自大正元年度	山 田 伊 之 助君
金貳圓	自大正二年度	
金貳圓	自大正三年度	

金參圓 自大正二年度三ヶ年分  
 自大正四年度三ヶ年分  
 自大正二年度五ヶ年分  
 自大正六年度五ヶ年分

島 誠 郁君  
 塚 本 政 次君

●大正二年度金澤醫學專門學校  
 十全會收入豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
第一款 金澤醫學專門學校十全會	一、六三〇・三九〇	
第一項 特別會員密附金	一四五・九〇〇	
第二項 職員寄附金	一四五・九〇〇	
第三項 通常會員會費	一、二八〇・〇〇〇	
第四項 醫學生會費	一、〇七〇・〇〇〇	
第五項 藥學生會費	二一〇・〇〇〇	
第六項 入會金	一三〇・〇〇〇	
第七項 入會金	一三〇・〇〇〇	
第八項 預金利息	七四・四九〇	
第九項 預金利息	七四・四九〇	

●大正二年度金澤醫學專門學校  
 十全會支出豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
經常部	一、五六五・三九〇	
第一款 金澤醫學專門學校十全會春季陸上運動會	一九〇・〇〇〇	
第一項 同上	一九〇・〇〇〇	
第二項 講 話 部	七〇・〇〇〇	
第一項 大會費	六八・〇〇〇	
第二項 通常會費	二・〇〇〇	
第三項 雜 誌 部	五四八・六〇〇	
第一項 雜誌費	四二〇・〇〇〇	
第二項 圖書費	九五・〇〇〇	
第三項 通信費	一五・六〇〇	
第四項 消耗品費	七・〇〇〇	
第五項 製本費	一〇・〇〇〇	
第六項 雜 費	一・〇〇〇	
第四項 ロンテニス部費	八〇・〇〇〇	
第一項 部 費	六五・〇〇〇	
第二項 大會費	一五・〇〇〇	
第五項 劍 道 部	七〇・〇〇〇	
第一項 大會費	三五・〇〇〇	
第二項 獎勵費	三五・〇〇〇	

第六項 柔道部	第一目 大會費	七〇〇〇〇
	第二目 獎勵費	三五〇〇〇
第七項 弓術部	第一目 大會費	三五〇〇〇
	第二目 備品費	一五〇〇〇
	第三目 獎勵費	二五〇〇〇
第八項 野球部	第一目 部費	八〇〇〇〇
	第二目 大會費	六五〇〇〇
第九項 會務費	第一目 當教師囑託手當	一三〇・五〇〇
	第二目 備品費	一九八〇〇
	第三目 印刷費	二〇〇〇〇
	第四目 消耗品費	〇・五〇〇
	第五目 雜費	五〇〇〇〇
第十項 學術實習費	第一目 藥品材料費	八五・四〇〇
	第二目 備品費	五五・四〇〇
	第三目 雜費	二〇〇〇〇
第十一項 豫備費		一〇〇〇〇〇
		七九・八九〇

第一目 豫備費	七九・八九〇
第十二項 端艇基金	一〇〇〇〇
第一目 同上	一〇〇〇〇

●大正二年度金澤醫學專門學校  
十全會臨時費支出豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
第一款 臨時費	六五・〇〇〇	
第一項 野球コート新設費	六五・〇〇〇	

●大正二年度金澤醫學專門學校  
校外特別會員會費收入豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
第一款 金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	一、一四・三二〇	
第一項 校外特別會員會費	八五・一〇〇	
第一目 大正二年度會費	五四九・〇〇〇	
第二目 前年度未納會費	二〇〇〇〇	
第三目 前納會費	三〇〇・〇〇〇	
第二項 利金	七三・一二〇	

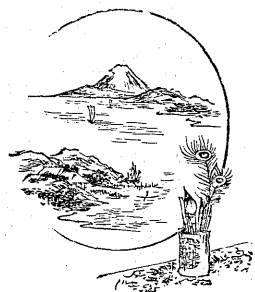
第一目 預金利息	七三・二〇〇	
第三項 繰越金	一九〇・二〇〇	
第一目 繰越金	一九〇・二〇〇	

●大正二年度金澤醫學專門學校  
校外特別會員會費支出豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
第一款 金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	六二四・二二〇	
第一項 會費	五六八・五〇〇	
第一目 雜誌費	四七六・四〇〇	
第二目 通信費	六二・一〇〇	
第一節 郵便電信料	五・八五〇	
第二節 在京囑託員通信料	一〇・〇〇〇	
第三節 會集金費	二六・二五〇	
第三目 雜費	三〇・〇〇〇	
第二項 豫備費	五五・六二〇	
第一目 豫備費	五五・六二〇	

●大正二年度金澤醫學專門學校  
校外十全會資金部支出豫算書

科 目	豫 算 額	備 考
第一款 金澤醫學專門學校々外十全會資金	一、〇九二・〇〇〇	
第一項 資金	一、〇九二・〇〇〇	
第一目 公債證書	一、〇九二・〇〇〇	



◎故今村文績氏紀念圖書購入寄付氏名

金壹圓	桑原 益方君	金壹圓	眞澤 貞一君	金壹圓	相馬 甲五郎君
金壹圓	林 篤君	金壹圓	福田 美明君	金壹圓	玉森 法靈君
金壹圓	深見 貞之助君	金壹圓	佐崎 伊久君	金壹圓	岡田 秀造君
金壹圓五拾錢	小野 醇吉君	金壹圓	中村 欣一郎君	金五拾錢	堀川 靜夫君
金壹圓	樋口 平次君	金壹圓	吉尾 開道君	金壹圓	額 又太郎君
金壹圓五拾錢	佐口 榮君	金壹圓	井上 松太郎君	金壹圓	平松 敏四郎君
金壹圓	田中 正一君	金壹圓	影山 清美君	金參圓	山 碕 幹君
金壹圓	脇坂 慶造君	金壹圓	高安 右人君	金壹圓	佐々木 達君
金壹圓	宮田 篤郎君	金五拾錢	金子 次郎君	金五拾錢	村上 庄太君
金五拾錢	上田 計二君	金五拾錢	石川 喜直君	金五拾錢	阿部 莊二君
金五拾錢	加藤 靜雄君	金五拾錢	松原 三郎君	金五拾錢	齊藤 房治君
金五拾錢	大藏 關重君	金五拾錢	山田 幸吉君	金五拾錢	北村 誠吾君
金四拾錢	雨森 良順君	金四拾錢	田中 一次郎君	金四拾錢	山本 直枝君
金四拾錢	芦澤 孝治君	金四拾錢	館 保 二君	金五拾錢	伊藤 喬君
金參拾錢	馬詰 定衛君	金參拾錢	天野 隆義君	金參拾錢	加藤 慶三君
金參拾錢	森 條次郎君	金參拾錢	山崎 重治君	金參拾錢	織田 信義君
金參拾錢	西野 宗之君	金參拾錢	松村 喜一君	金參拾錢	近藤 清吾君

金參拾錢	奧山 義盛君	金參拾錢	吉川 六郎君	金參拾錢	巨田 政信君
金參拾錢	太田 尙男君	金參拾錢	佐竹 秀一君	金參拾錢	馬場 庄江君
金參拾錢	上野 善藏君	金參拾錢	吉田 圓磨君	金參拾錢	浦 晴二君
金參拾錢	石川 精一君	金參拾錢	石澤 太作君	金參拾錢	絹川 友次郎君
金參拾錢	近藤 一怒君	金參拾錢	深澤 治三郎君	金貳拾錢	中川 久成君
金貳拾錢	中村 義忠君	金貳拾錢	折谷 友次郎君	金壹圓五拾錢	古屋 榮治君

合計金四拾五圓拾錢

以上ノ金額ヲ以テ左記ノ書籍ヲ買入シ十全會圖書部へ紀念圖書トシテ寄附候也

1. Einhorn,	Krankheiten des Darms.	3,50
2. Haeckel,	Die Lebensmunder.	,50
3. Haeckel,	Weltrüstsel.	,50
4. Schleip,	Atlas der Blutkrankheiten.	15,00
5. Verworn,	Physiologie.	9,00
6. Grawitz,	Pathologie des Blutes.	16,00

此外郵稅料

郵 稅

五拾四錢  
六 錢

合計四拾五圓拾錢也

大正二年六月

發起人一同